第23回ふくおか県民文化祭2015協賛事業

発掘現場から 文化力

キラリ☆久留米

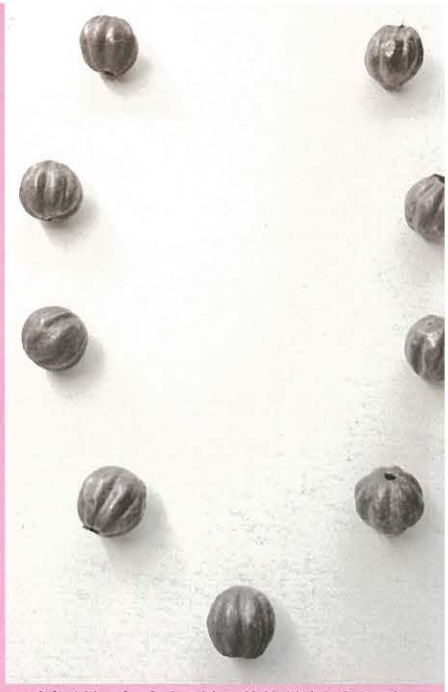
第40回くるめの考古資料展

久留米の新発見

平成24～26年度発掘調査速報

▲不思議な土師器の意外な用途（筑後国府跡出土）

▲青空の下で進む発掘調査（汐入遺跡）



▲福岡県で初出土！謎の装飾品くちなし玉（隈山古墳群出土）

▲筑後で初出土！小銅鐸の持ち主は誰？（高三潴遺跡）

▲緑の陶器は官人の証し（二本木遺跡出土）

平成27年（2015年）

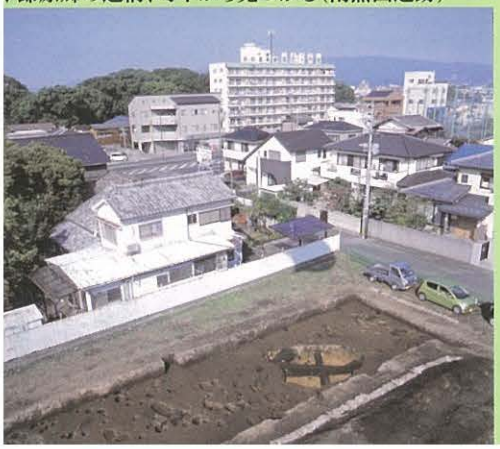
10月17日（土）～11月15日（日）

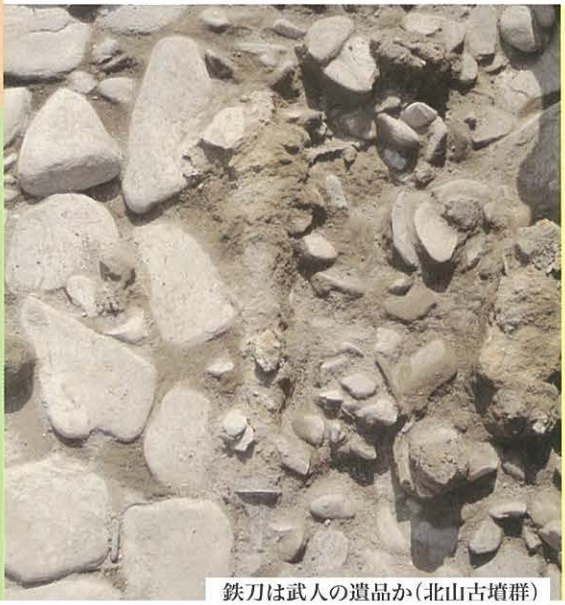
会　場/久留米市埋蔵文化財センター

主　催/久留米市・久留米市教育委員会

▲右も左も土師器だらけ（二本木遺跡）

▼節原郷の遺構、町中から見つかる（南薫西遺跡）





鉄刀は武人の遺品か（北山古墳群）

▲屋敷の中の墓、墓の中の遺品（碇遺跡）

▼洗いたての馬の歯（古賀ノ上遺跡出土）

ごあいさつ

久留米市は人口 30 万人を擁する、県南地域の中核都市です。九州一の大河である筑後川と、筑紫平野の緑に育まれた自然豊かな環境に恵まれ、古くから多くの人々が往来し、集い、また、政治、経済、文化の中心として発展してきました。そうした先人たちの遺産は、今日もなお、私たちの足元に数多く残っています。久留米市では、開発によって失われる先人たちの遺産、特に地中に眠る埋蔵文化財を後世に伝えるために、現状保存、あるいは発掘調査による記録保存を行っています。

40 回の節目を迎えた今回の考古資料展では、平成 24 年度から 26 年度に調査した 36 遺跡 91 ヶ所の発掘調査から、新たな発見があった遺跡を中心に展示を行います。新たに見つかった埋蔵文化財の魅力を通して、保護の必要性を考えていただければ幸いです。

最後に、今回の考古資料展を開催するにあたり、ご協力をいただきました関係各位の皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成 27 年 10 月 17 日

久留米市長　楢原　利則

はじめに

今回の展示では、久留米市で平成 24～26 年度の 3 年間に行った発掘調査を、新たに見つかった遺構や遺物を中心に紹介します。

遺跡の発掘調査では、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）や井戸、竪穴建物（たてあなたてもの）、土坑（どこう）、お墓といった遺構が見つかります。こうした遺構には、久留米で初めて見つかったものもあります。益生田（ますおだ）古墳群では、発掘調査した石室がいずれも傾いていました。石室の下敷きになった土器から、約 1300 年前の大地震で崩れた可能性があり、古代の大災害を今に伝えます。

また、存在は知られていても、詳しいことは分からなかった遺構が発掘調査で明らかになることもあります。筑後国府跡（ちくごこくふあと）で見つかった道路跡は、高良大社の古文書に登場する道路の跡だと考えられます。久留米城外郭（そとぐるわ）遺跡では久留米城の土塁（どるい）を調査し、久留米藩主となった有馬氏の城づくりの一端（いったん）を見ることができました。

遺跡から見つかったのは、遺構だけではありません。土器や陶磁器、石器、金属器といった遺物も遺跡から出土します。平成 24～26 年度に行った発掘調査では、高三潴（たかみずま）遺跡の小銅鐸（しょうどうたく）や隈山（くまやま）古墳群のくちなし玉、二本木（にほんぎ）遺跡の磬（けい）、二子塚（ふたごづか）遺跡の機銃弾などが久留米で初めて出土した遺物として挙げられます。特に小銅鐸とくちなし玉は、それぞれ筑後地方や福岡県下でも初めて出土した珍しい遺物です。小銅鐸は朝鮮半島から中国地方にかけて分布し、くちなし玉は西日本各地の古墳から出土しています。久留米が他の地域と豊かな交流を持ち、人々が盛んに行き来していたことが分かります。

平成 24～26 年度に調査した遺跡　36 遺跡 91 ヶ所の一覧

遺　跡　一　覧　表

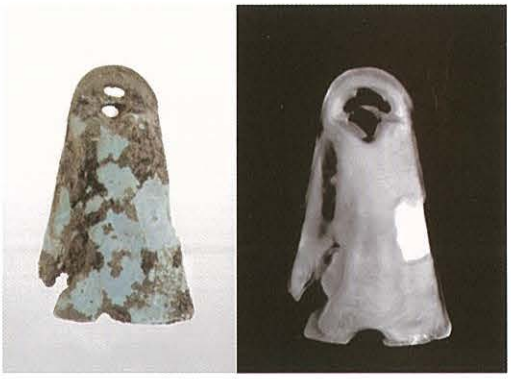
No.	遺　跡　名	主な時代	No.	遺　跡　名	主な時代
1	益生田古墳群	古墳	19	南薫西遺跡	奈良～平安
2	古賀ノ上遺跡	古墳～奈良	20	辻遺跡	弥生
3	稲数遺跡	弥生～鎌倉	21	十間屋敷遺跡	江戸
4	下馬場古墳	古墳	22	櫛原侍屋敷遺跡	江戸
5	正覚山浄土寺飯田庵跡	鎌倉～室町	23	久留米城外郭遺跡	江戸
6	吉木古墳群	古墳	24	久留米城下町遺跡	江戸
7	木塚遺跡	古墳	25	庄島侍屋敷遺跡	江戸
8	樋ノ口遺跡	弥生・奈良	26	京隈侍屋敷遺跡	江戸
9	竹の子古墳群	古墳	27	中原遺跡	平安
10	隈山古墳群	古墳	28	北山古墳群	古墳
11	二本木遺跡	鎌倉～室町	29	白口経塚遺跡	古墳
12	日出原南遺跡	鎌倉～室町	30	二子塚遺跡	古墳・昭和
13	ヘボノ木遺跡	奈良～平安	31	筒川遺跡	弥生
14	横道遺跡	平安	32	汐入遺跡	弥生
15	筑後国府跡	奈良～平安	33	碇遺跡	鎌倉
16	朝妻焼古窯跡	江戸	34	高三潴遺跡	弥生
17	市ノ上遺跡	弥生	35	玉満松木ソノ遺跡	弥生
18	大園遺跡	弥生	36	西牟田東京遺跡	鎌倉

弥生時代の新発見　久留米西部の弥生人たち

高三潴遺跡（たかみずま）　第１～４次調査（平成 25～26 年度）

小銅鐸が出土した第４次調査地点

小銅鐸は、左側に見える溝から出土しました。溝には水が湧いており、大量の木器も一緒に出土しています。



出土した小銅鐸

左が、出土した状態の写真で、右がＣＴスキャンで見た画像です。割れている箇所が目立ちますが、ＣＴスキャンだと銅鐸のシルエットがはっきりと浮かびます。

高三潴式土器

弥生時代後期前半（およそ 2,000～1,950 年前）の九州北部を代表する土器です。

高三潴遺跡は三潴（みづま）町高三潴の低台地にあります。高三潴式土器が出土した、九州北部を代表する弥生時代の遺跡として有名ですが、発掘調査はほとんど行われず、その実態は不明でした。しかし今回の発掘調査によって、様々な発見がありました。弥生時代の建物（掘立柱建物（ほったてばしらたてもの））の柱の基礎部や杭（くい）、建物の部材などの木器が腐（くさ）らずに地中に埋まっており、大きな溝からは小銅鐸（しょうどうたく）が筑後地方で初めて出土しました。これらの遺構や遺物などから、弥生時代の高三潴に集落があったことが裏付けられ、謎に包まれた高三潴遺跡の様子が徐々に明らかになってきています。

玉満松木ソノ遺跡（たまみつまつき）　第２～４次調査（平成 25 年度）

三潴町玉満にある水沼（みぬま）の里 2000 年記念の森公園一帯には、弥生時代後期の集落があったと考えられています。

今回はその一画を発掘し、集落の中心と考えられる巨大な井戸を発見しました。この井戸は直径が４ｍ以上、深さは３ｍもあり、底からは未（いま）だに水が湧いていました。井戸には多くの土器が投げ捨てられており、井戸の周辺には、いくつもの竪穴住居が建つ集落があったと予想されます。

第２次調査で見つかった巨大な井戸

左右に立っている作業員と比べても、その大きさがお分かり頂けるでしょう。

小銅鐸とは･･･

銅鐸の中でも、高さが約 20cm 以下の小さな銅鐸をこう呼びます。朝鮮半島から中国地方にかけて分布しており、近畿地方で出土する巨大な銅鐸の原型になった、古いタイプの銅鐸だと考えられています。

汐入遺跡（しおいり）　第２・３次調査（平成 25～26 年度）

汐入遺跡は安武町の低台地上にあり、国史跡として名高い御塚（おんづか）・権現塚（ごんげんづか）古墳や筑邦西中学校の西側に位置します。圃場（ほじょう）整備に伴い、約 7,300 ㎡もの面積を発掘調査しました。

弥生時代前期後半の竪穴住居は、丸い掘り込みの中心に、楕円形の穴と２つの小さい柱穴がある竪穴住居でした。朝鮮半島にルーツがある「松菊里（しょうぎくり/スンギクリ）型住居」と考えられます。周辺では同じ時期の土壙墓（どこうぼ）も見つかっています。今も集落がある地域に、弥生時代の初めから人々が住んでおり、しかも朝鮮半島との交流があったことがうかがえます。

また、弥生時代中期の甕棺墓（かめかんぼ）や木棺墓（もっかんぼ）がいくつもありました。特に甕棺墓は、２列に並んで整然と並ぶ「縦列状（じゅうれつ）配置」の状態で見つかっています。

発掘調査が進む汐入遺跡

見渡す限りの青空！すっきりと晴れた日には、発掘調査もはかどります。

左奥に見えるのが筑邦西中学校、中央奥に見える森が御塚・権現塚古墳です。

上空から見た竪穴住居

写真中央の２つの丸くて浅い穴が「松菊里型住居」です。それぞれが重なっているのが分かるでしょうか。下の竪穴住居が埋まった後で、すぐそばに新しい竪穴住居を建てたようです。

検出された甕棺墓

弥生人は、甕棺より一回り大きい穴を掘ってから、その中に甕棺を据えて埋めていました。巨大な甕棺を持ってきて、大きな穴を掘り、さらに甕棺を据えて死者を葬（ほうむ）ることは、とても一人でできることではありません。死者を葬るために、弥生人がムラの中で大変な労力を費やしていたことが分かります。

松菊里型住居とは･･･

韓国の松菊里遺跡で最初に見つかったタイプの竪穴住居です。江辻遺跡（福岡県粕屋町）などの弥生時代早期から前期の集落でも見つかっています。

古墳時代の新発見　青天井になった石室、金銀の副葬品

益生田古墳群　第４次調査（平成 26～27 年度）

久留米市からうきは市に及ぶ耳納山地の北麓は、全国でも有数の、古墳が集中する地域です。益生田古墳群もその一つで、耳納山地の標高 80～200m付近で現在４つのグループからなる約130 基の古墳が確認されています。

第４次調査では６～７世紀頃に造られた第 84・85・87・88・90 号墳の５基を調査しています。いずれも直径15m前後の円墳で、平面形は「胴張り」と呼ばれるふくらみを持った単室または複室構造の横穴式石室を有しています。石室の特徴として５基すべてが盛土ごと北側へ傾くことが判明しました。古墳群は水縄断層系の一部となる益生田断層の上にあり、水縄断層の直近の活動を原因とした天武７年（678 年）の筑紫大地震によって傾いたと考えられます。

崩れた石室の下敷きになった土器

古墳のお供え物だった土師器や須恵器が、地震で崩れた石室の石の下敷きになって割れています。この土器が７世紀後半の土器だったことから、石室が崩れる原因となった地震が筑紫大地震であると推定することができました。

傾いた 88 号墳の巨石

本来なら垂直になっているはずの石室入口の巨石が、右側へ傾いてしまっています。

隈山古墳群（くまやま）　第１次調査（平成 24 年度）

隈山古墳群は、久留米市国分（こくぶ）町の丘陵上に広がる６世紀後半（約 1,400 年前）の遺跡です。平成 24 年（2012 年）の夏、外環状線のトンネル整備に伴い発掘調査が行われ、２基の円墳が見つかりました。そのうち直径約 20mの２号墳は、北側に古墳を取り巻くように幅約 1.8mの溝が確認され、遺体を埋葬する全長約 10mの横穴式石室が発見されました。

石室の床面からは、死者への捧げ物や副葬品が多数発見されました。土師器や須恵器といった土器や、鉄製の武器・工具・馬具、そして装身具などですが、中でも九州で３例目の出土となった銀製のくちなし玉は、西日本の有力者との関係が想定される注目すべき遺物です。

崩（くず）れかけて見つかった３号墳

墳丘は削られており、石室の石材も大部分が失われているのが分かります。

入口から見た２号墳の石室

墳丘が削られて、石室が青天井と化していました。床面には、何枚もの平たい石が敷き詰められています。

２号墳から出土した銀製のくちなし玉

黄色い花をつけるクチナシの木の実に似た形をしているので、この名があります。石室の中からバラバラになって出土しましたが、実際にはひもを通してネックレスにしていたのでしょう。中は空洞で、継ぎ目が見えることから、半球の状態から接合して作ったと考えられます。

２号墳からはさらに、水晶や琥珀（こはく）、メノウ、ガラスで作られた様々な玉類や、金の耳環（じかん）（耳飾り）などのアクセサリーが出土しました。

竹の子古墳群　第１次調査（平成 24 年度）

今から約 1,400 年前、久留米市街地の東にそびえる高良山の南麓には、たくさんの古墳が造られました。竹の子古墳群もその１つで、周辺には数基の古墳が残されています。発掘調査では、６世紀末頃に造られた直径約 14m程度の小型の円墳が発見され、遺体を埋葬する横穴式石室が確認されました。

石室の床面からは、水晶製の勾玉やガラス玉、鉄のヤジリである鉄鏃などが見つかっています。また、石室の周りには溝が巡っており、土師器や須恵器といった土器類が出土しています。

見つかった横穴式石室

奥に見える石室は、上から見ると丸くなっています。こうした石室は、筑後地方から肥後北部で見られます。

北山古墳群　第４次調査（平成 25 年度）

北山古墳群は荒木町白口に所在していました。第４次調査では、最後に残った１号墳を調査しました。調査の結果、古墳は単室の横穴式石室をもった直径 11.2mの円墳で、６世紀中頃に造られたことが明らかになりました。

古墳の玄室には、鉄刀や鉄鏃などの武器類、ガラス玉や耳環などの装飾品が副葬されていたほか、円筒埴輪も出土しました。この埴輪は、周辺地域の首長墓にあげられる二子塚古墳で出土した埴輪と似ており、久留米市西部に分布する古墳を造った集団との関連が注目されます。

北山古墳群１号墳の墳丘

九州新幹線の線路のそばに、７基あったといわれている古墳群の最後の１基が残っていました。

北山古墳群１号墳の石室

大きく崩れていますが、上から見ると羽子板の形に似ています。壁が少し膨らんでいるのが特徴です。

筑後国府跡（ちくごこくふあと）　第250～282次調査（平成24～26年度）

第274次調査地点は、Ⅲ期政庁があった朝妻（あさづま）町に位置します。ここは、12世紀代の筑後国の役人である在国司（ざいこくし）の屋敷があったとされる地域です。調査の結果、長さ22.7m、幅4mの大型の建物（掘立柱建物（ほったてばしらたてもの））や道路の痕跡（こんせき）が見つかりました。この建物は時期や配置から、在国司の屋敷内の建物と考えられます。道路の痕跡は、建物の東側、谷状に低い地形を南北に走っていました。高良大社に伝わる中世末期の書物『高良記』には、在国司の屋敷の東側を「タニシリノミチ」が走っていたという記述があります。今回の調査では、在国司の屋敷だけではなく、古い記録にある道路も発見できました。

空から見た第274次調査地点

遠くに見える山は高良山です。

筑後国府とは・・・

今から約1,300年前、大和朝廷は中央集権国家を作るべく、中央から派遣した国司によって国々を統治する体制を築きました。国府は、国司がまつりごとを行う政庁を中心に、関連する役所が集まった役所群で、各国に1ヶ所ずつ設置されました。

筑後国府は、7世紀中頃に現在の合川町田代（たしろ）に設置された「前身官衙（ぜんしんかんが）」にルーツがあります。これまで行われた280回以上の発掘調査によると、政庁の建物は、7世紀末に合川町古宮（ふるこう）（Ⅰ期政庁）で営まれるのを皮切りに、8世紀中頃には合川町阿弥陀へ（Ⅱ期政庁）、10世紀中頃に朝妻町へ移転します（Ⅲ期政庁）。そして11世紀末には、横道遺跡（現在の南筑高校付近）へと移転し（Ⅳ期政庁）、3回移転した様子が明らかになっています。

ついに見つかった「タニシリノミチ」

周りの地面より硬くなった道路の跡が、谷底に沿うように検出されました。

南薫西遺跡（なんくんにし）　第8次調査（平成26年度）

本調査地は、南薫西町にある南薫小学校の南約50mに位置します。遺跡からは長さ11m以上の大きな掘立柱建物が2棟見つかりました。大きな掘立柱建物は、当時の有力者の館だったのでしょうか。

巨大な土坑からは、土器に墨で文字や絵を描いた墨書（ぼくしょ）土器や、明かりをともす際に使用していた土師器、当時の高級食器である緑釉（りょくゆう）陶器や輸入陶磁器が出土しました。墨書土器に書かれた文字で最も多かったのは、「宅代」の2文字です。「宅代」と書かれた土器は、熊本県や島根県でも出土していますが、残念ながら読みや意味などは分かっていません。

土器が捨てられた巨大な土坑

直径4m以上、深さ約1mの穴から、大量の土師器や須恵器が出土しました。その土師器や須恵器の中に、文字が書かれた土器が混じっていたのです。いったい誰が、何のために土器に文字を書いたのでしょうか。

古賀ノ上遺跡　第３次調査（平成25年度）

北野町の北東にある古賀ノ上遺跡は、奈良時代の役所の跡として注目されていた遺跡です。今回、病院建設に先立つ調査で2,500㎡の面積を調査しました。調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物、飛鳥時代から奈良時代の大型の建物や井戸、土器を捨てた穴などが見つかり、その中から「天」という字がスタンプされた土師器や、馬の歯、馬具、鎧の部品、製塩土器の破片などが見つかりました。

特に注目されるのは、塩の容器である製塩土器の破片が300個以上も出土したことです。なぜ、海から離れた北野町で、これほどたくさんの製塩土器が出土したのでしょうか。その理由は出土した馬の歯にあります。良い馬を育てるためには、馬に塩を舐めさせる必要があるからです。馬の歯と製塩土器が出土したということは、当時この場所で馬の飼育がおこなわれていた可能性が高いことを示しています。

また、土器で作った仏具や役人が着用するベルトの金具なども出土しており、有力な豪族が馬を育てる牧場を管理していた可能性があります。

発掘調査が進む古賀ノ上遺跡

雨上がりのため、地面が光って見えます。遺構の密度が高く、写真にもたくさんの穴が写っています。

銅製の帯金具

官人のベルトに使われていた金具です。

復元される大甕

２人がかりで運ぶほどの、大きな甕が出土しました。欠けている部分を石膏で復元して、ポスターカラーで元の土器に似た色を塗っています。

出土した製塩土器の破片

素焼きの土器に海水を注ぎ、沸騰させて塩を作りました。塩を入れたまま容器にして、持ち運んだり捨てたりしたので、破片で出土することが多いのです。

中世の新発見　大量生産の始まり、変わる集落のかたち

二本木遺跡（にほんぎ）　第29～31次調査（平成24～26年度）

高良山の西麓、外環状線の開通により都市化が著しい御井（みい）町に位置するのが、弥生時代から中世にかけての集落遺跡である二本木遺跡です。平成24～26年の間に、宅地造成に伴う発掘調査が毎年のように行われました。

第30・31次調査では、地下に築いた倉庫である地下式坑や、土師器や中国産の輸入陶磁器を捨てた中世の廃棄土坑がいくつも見つかりました。穴の中いっぱいに土師器の坏（つき）や皿が捨てられた光景は、見ているだけで圧倒されます。第30次調査では、仏具の一種である「磬（けい）」の破片や、石でできた五輪塔（ごりんとう）の部材が出土しました。今は残っていない寺院があったのでしょうか。

廃棄土坑と出土した土師器

左の写真の穴の中に点々と見えるのは、全て土師器や陶磁器です。宴会などで一度にたくさんの土師器を使うと、このように一度に大量に出土することがあります。右の写真を見ると、一度に作られたのか、同じような色と大きさをしていることが分かります。

磬の破片

磬とは、鐘のように吊るし、叩いて鳴らす道具です。破片だけが出土しましたが、久留米で初めて出土した道具です。

碇遺跡（いかり）　第5次調査（平成24年度）

碇遺跡は安武町住吉の西部に広がる遺跡で、第5次調査では弥生時代から中世までの多様な遺構と遺物が見つかっています。

中でも中世に造られたお墓が発見され、青銅鏡や青銅製の小鋺（わん）、化粧品入れなどに使われた合子（ごうす）が副葬されていました。お墓の周りには、同じ時代の可能性がある掘立柱建物も確認されており、屋敷の敷地の中にお墓が造られた可能性があります。屋敷墓の出現は、この地域の中世集落の様子を探る上で、貴重な資料です。

お墓から出土した副葬品

丸い青銅鏡や白い磁器の合子、銅の小鋺が一箇所に集められていました。分析から、青銅鏡の表面には繊維（せんい）が付着しており、布にくるまれていた可能性があります。

朝妻焼古窯跡（あさづまやきこようあと）　第２次調査（平成 26 年度）

御井（みい）町から合川町に向かって延びている丘陵上には、江戸時代中期の正徳（しょうとく）～享保（きょうほう）年間（18 世紀前半）の約 20 年間、久留米藩営の陶磁器「朝妻焼」を焼く窯がありました。ここでは肥前から職人を招き、磁石（じせき）は天草、陶土は地元の土を使い、肥前の製品と遜色（そんしょく）ない陶磁器が焼かれました。製品には「朝」や「寿」の銘が記されていることが最大の特徴です。

平成３年（1991 年）に、窯の一部と物原（ものはら）（焼成失敗品などを捨てる場所）の調査を行い、窯の正確な位置や、焼成室３室分と煙道部が残っていることが判明していました。今回は窯の全容を把握するために再調査を行い、焼成室の南側に入り口が設けられていたことや壁の残存状況、煙道の構造など不明確であった窯本体の詳細について貴重な情報が得られています。

窯跡の中の道具

白く見えるのは、陶磁器を窯の中に置くための「ハマ」と呼ばれる台です。これまでの調査では、数千個ものハマが出土しています。

近代の新発見　荒木駅空襲の証人

二子塚遺跡（ふたごつか）　第７次調査（平成 24 年度）

二子塚遺跡は、荒木小学校の周辺に広がる遺跡です。昭和初期まで二子塚古墳という前方後円墳があったとされ、第７次調査でも、円筒埴輪の破片が出土しました。

この調査では、意外な遺物が出土しました。地面を覆う畑の土から、機関銃の銃弾が出土したのです。アメリカ製のブローニングＭ２機関銃の銃弾とみられ、昭和 20 年（1945 年）の荒木駅空襲の際に、アメリカ軍の戦闘機から発射された可能性が高いことが明らかになりました。

調査が行われた平成 25 年（2013 年）には、昭和 20 年８月８日の荒木駅空襲を撮影した映像が発見され、その後も機銃掃射の証言や、機銃掃射の銃弾の痕跡が続々と見つかっています。今回出土した小さい銃弾は、物語らぬ荒木駅空襲の証人と呼べるでしょう。

出土した機関銃の銃弾

出土した銃弾は「曳光弾（えいこうだん）」という種類の銃弾です。根元は円筒状になっており、中に粉末が残っていました。機関銃から放たれると、粉末が着火して、銃弾の軌跡が光って見えるようになる仕掛けです。

紹介した遺跡と日本・久留米の歴史年表

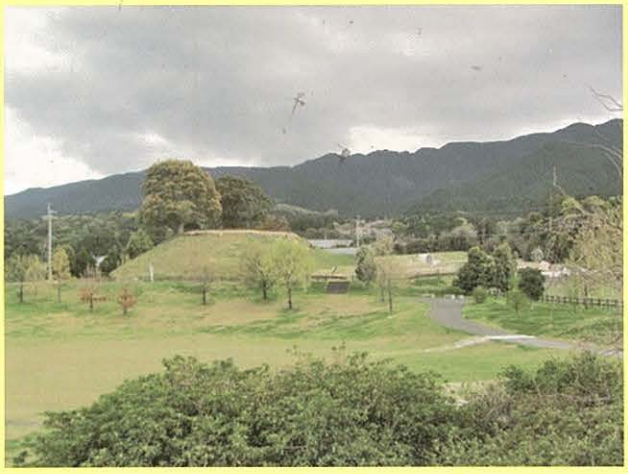
	時代	紹介した遺跡	日本・久留米の主なできごと
紀元前30000年	旧石器		狩りや漁・採集などで生活する 土器や弓矢を使い始める
紀元前10000年	縄文	汐入遺跡の松菊里型住居・甕棺墓	稲作が伝わる
紀元前500年	弥生	高三潴遺跡の小銅鐸 玉満松木ソノ遺跡の井戸	倭国大乱 卑弥呼が邪馬台国を治める 古墳が造られ始める
500年	古墳	北山古墳群 竹の子古墳群 益生田古墳群 隈山古墳群	筑紫君磐井の乱（527） 仏教公伝（538）
700年	飛鳥	筑後国府跡（Ⅰ期政庁）	白村江の戦い（663） 筑紫大地震（679） 藤原宮に都を移す（694）
800年	奈良	古賀ノ上遺跡・南薫西遺跡の建物群 筑後国府跡（Ⅱ期政庁）	平城京に都を移す（710） 国分寺・国分尼寺建立の詔（741） 平安京に都を移す（794）
1200年	平安	筑後国府跡（Ⅲ期政庁） 筑後国府跡（Ⅳ期政庁）	
1300年	鎌倉	二本木遺跡の地下式坑 碇遺跡の土壙墓	鎌倉幕府の成立 文永の役(1274) 弘安の役(1281)
1600年	室町	二本木遺跡の廃棄土坑	室町幕府の成立（1336） 応仁の乱（1467） 毛利秀包が久留米城主となる（1587）
1800年	江戸	久留米城外郭遺跡の土塁 久留米城下町遺跡のるつぼ 朝妻焼古窯跡 京隈侍屋敷遺跡の金属製品	関ヶ原の戦い（1600） 田中吉政、筑後国主となる（1601） 江戸幕府の成立（1603） 有馬豊氏、久留米藩主となる（1621） 久留米城と城下の街並みがほぼ完成する（1646頃） 戊辰戦争（1868～1870）
2000年	明治 大正 昭和 平成	二子塚遺跡出土の銃弾	明治維新（1868） 久留米市市制施行（1889） 太平洋戦争（1941～1945） 荒木駅空襲・久留米空襲（1945） 1市4町が合併（2005） 中核市へ移行（2010）

筑後国府跡第 274 次調査の現地説明会

あいにくのくもり空でしたが、約 120 人の市民の方々が来て下さいました。

前回（平成 24 年）の発掘調査速報展示

今回のような発掘調査速報の展示は、およそ３年ごとに行っています。展示に合わせて、この写真のような調査担当者による展示解説（ギャラリートーク）や、歴史講座などの関連イベントも開催しています。



整備された田主丸大塚古墳公園

過去７回行われた田主丸大塚古墳の発掘調査の成果を元に、６世紀後半としては九州最大の前方後円墳の規模を復元しました。

周辺は歴史公園として整備しており、田主丸大塚古墳を模型や土層などで紹介しています。

発掘だけでは終われない！

埋蔵文化財は国民共有の貴重な財産です。私たちは、市民一人ひとりが埋蔵文化財のことをもっとよく知り、大事にしていただきたいと考えています。

久留米市では、実際の遺構や遺物を交えて説明する**現地説明会**、遺跡の写真や出土遺物を展示する**考古資料展**、そして歴史公園や看板設置などの**史跡整備**などを通して、埋蔵文化財のことを少しでも市民の皆様に知っていただけるよう取り組みを行っています。

古賀ノ上遺跡第３次調査の現地説明会

約 110 人の市民の方々が来て下さいました。調査担当者の説明に、見学者の視線も集中します。

高三潴遺跡第３次調査を見学する小学生たち

調査地点のそばにある三潴小学校の児童の皆さんが遺跡の見学に来ました。目の前にあるのは本物の遺跡、みんな熱心に説明を聞いていました。

第 40 回くるめの考古資料展

久留米の新発見　平成 24～26 年度発掘調査速報

平成 27 年 10 月 17 日

発行：久留米市　市民文化部　文化財保護課
久留米市城南町 15 番地３

印刷：服部印刷株式会社
久留米市梅満町 410－１